「ごんぎつね」の山場の模擬授業

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　日本福祉大学　小林信次

１　はじめに

教育実習に向けて、「国語科指導法」や「実習の事前指導」を行っている。紹介するのは、「ごんぎつね」の「山場」の学生の模擬授業である。一つのグループが模擬授業をやり、生徒役と参観者に分かれて進めている。

授業後、話し合い（分析会）を持っているが、議論を深めるために、分析の視点を持たせている。

国語の模擬授業のために、授業後の話し合い、分析の視点として、次のような観点を示した。

今回担当した、国語の「ごんぎつね」の授業は、これらの項目に、答えられるだけの

内容であった。主発問は、「兵十の変化」についての二つであった。「ようし。」にこめられた兵十の心理、「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」の兵十のごんへの変化の読みとりでであった。（指導案参照）

２　「ごんぎつね」の六場面、山場の授業としての分析のすすめ方

（１）　生徒役参観の感想をもとに

①生徒役の感想をもとに

②参観者の感想をもとに

・議論・討論するためには

掘り下げる箇所がいる・・・・これができるようにしていく。

（２）　授業の分析は大きく二つある

①教師の指導力の分析・・・子ども集団への切り込み方

・ 教師の発問やそれに対する子どもの反応、引き出し取り出し方など

（他の授業でも共通するもの）

②教師の教材の取り上げ方の分析・・・指導案・授業で読む力をつけたのか

・教材への切り込み方

「ごんぎつね」の山場の構成、切り込み方

③授業のための準備も含めた積み上げ

（３）　共同的学びあい

大学での模擬授業という点での補足・・・教育実習とのつながり ・議論の仕方 ・記録方法

・指導案の作成 ・教材（他の教科も）の分析など

３　『ごんぎつね』の山場の指導案（学生がグループで作成）

ここに紹介しているのは、指導案の主な内容である。模擬授業の前には事前の指導会を何回も持っている。

1. 単元について

　この題材は、学習指導要領第3学年及び第4学年の目標(3)「目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、幅広く読書しようとする態度を育てる。」と、C　読むこと(1)ウ「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。」を受けて構成した。

　この物語は、ひとりぼっちの小ぎつねごんと、兵十が様々な出来事を通して関わりあっていくものである。場面ごとにごんの兵十に対する気持ち、兵十のごんに対する気持ちの変化が読み取れる部分があり、この気持ちの変化はこの物語を理解する上で重要な点であるため、時間をかけて深く読み進めていく必要がある。また、「子ぎつね」ではなく「小ぎつね」、「白いけむり」ではなく「青いけむり」など独特の表現があり、その表現の仕方も物語のキーワードとなっているため取り上げる必要がある。以上のことから、物語の読解に重点を置くことをねらいとした授業を構成する。

1. 指導の進め方

　今回の授業では、登場人物の気持ちを読み取ることと、物語の読解(言葉の微妙な変化や独特な表現など)に重点を置くことをねらいとする。そのために、第6章の場面を取り上げ、登場人物の気持ちに近づけることができるように、登場人物になりきり、演じる機会をつくることで登場人物の心情に迫っていく。そして、発表の機会を多くもつことを大切にし、児童間で他の意見を聞く、自分の意見を人に伝える力を身につけられるようにする。互いの考えの共通点や相違点を考えながら話し合うとともに、一人一人の感じ方の違いに気づくことができるように進める。そして、自分の意見の根拠としたことを友達の意見と比べることを通して、自分の意見を見つめ直すことと共に、作品に対する理解をより深めさせたい。また、文章で表すことが苦手な児童が多いため、手紙を書くことで文章を書く訓練をしていく。

1. 本時の目標

　　『兵十のごんに対する気持ちの変化を読み取ろう』

（第６場面を読んで、ごんに対する兵十の気持ちの変化を読み取ると共に、想像して手紙を書く。）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 国語への関心・意欲・態度 | 読む能力 | 言語事項 |
| 物語の場面や登場人物の気持ちを想像しながら読み、考えたことを発表しようとしている。 | 兵十のごんに対する気持ちの移り変わりを本文から読み取り、考えようとしている。 | さまざまな表現技法（ex.青いけむり）を知り、それによってどんな効果があるのか理解しようとしている。 |

学習活動の展開

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 学習過程 | 時間 | 学習の流れ　○支援 | 児童の反応 |
| **導入**  ・前回の復習  **展開**  ・本時の学習課題を知る  ・6の場面の音読  ・「ようし。」について想像し、演じる  ・『ごん、おまえだったのか。』について考える  ・「青いけむり」の意味を考える  **まとめ**  ・手紙を書く | (5分)  5分  (35分)  5分  10分  8分  8分  (5分)  5分 | ○6場面のごんの行動や気持ちの変化について復習する  T「今日の目標をみんなで読んでみましょう。」  ○学習課題を意識させるため、全員で声に出して読ませる  T：「では、今日考えていく6章を一度みんなで読んでいきます。○○さんから一段落ずつ読んでいきましょう。」  T：「兵十の『ようし。』のあとにはどんな言葉が続くかな？想像して書いてみよう。また、どんな気持ちで『ようし。』と言ったのかも考えてみよう。」  ○ワークシート記入の間、机間指導を行う。何人かに後でみんなの前でやってもらえるか聞く  T：「では実際にみんなの前でやってみてくれる人いますか？」  ○挙手する児童がいたらあてる。いなかったら声をかけた児童にできるか聞く  T：「兵十が部屋に入ると、土間にくりがかためて置いてありましたね。ただおいてあるのと、固めておいてあるのではどんな違いがありますか？」  T：「ごんを撃つ前と撃った後で兵十はごんの呼び方が変わりました。どう変わったかな？」  T：「どうして変わったのかな？」  ○『あのごんぎつねめ。』と『ごん、おまえだったのか』のちがいについて考えさせる。  ○5章で兵十が加助  T：「火縄銃の煙はどのようなものでしたか？」  T「青くて細い煙を実際に書いてくれる人はいますか？」  T：「実際に青い煙を見たことがある人はいますか？」  T：「では青くて細い煙とは何を表していると思いますか？」  T：「では、ここで1章から5章までみんながまとめてくれたごんと兵十の変化について復習してみましょう。」  ○まとめた紙を黒板に張る。  T：「これを参考に兵十かごんにお手紙を書いてみましょう。」 | ●全員で音読  「兵十のごんに対する気持ちの変化を読み取ろう」  ●一人ずつ音読  ●ワークシート記入  ・殺してやるぞ  ・懲らしめてやる  ・びっくりさせてやろう  ・あえて何も言わず静かに『ようし。』  ・いくぞ！きつね！  ●兵十になりきって台詞を発表する  ●兵十がどんな気持ちだったかも発表させる。  ・ていねいに置いた  ・気持ちをこめて置いた  ・贈り物に見えるように  ・ごんぎつねめ→ごん  ・きつね→おまえ  ・ごんを恨んでいた気持ちが消えたから  ・くりなどをくれたのがごんだと知ったから  ・ごんを撃ったことを後悔しているから  ・青くて細い煙  ●黒板に書く  ・ない  ・ある  ・兵十の悲しい気持ち  ・後悔している気持ち  ・ごんの魂  ●ごん宛に、兵十宛てに手紙を書く。 |

４　授業分析のまとめ

今回担当した「ごんぎつね」のグループの模擬授業は、最初に示した分析の項目に、答えられるだけの内容であった。主発問は、「兵十の変化」についての二つであった。「ようし。」にこめられた兵十の心理、「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」の兵十の変化の読みとりでであった。また、分析も視点をしぼって議論されていた。

下記に紹介するのは、「ごんぎつね」の模擬授業担当班のコメントである。

「私たちは、新美南吉作「ごんぎつね」の第6章のクライマックスを模擬授業で扱いました。教材研究を重ねれば重ねるほど、いろいろな発見がありました。また、教材研究を繰り返すことで、疑問に思うことも増えていきました。自分たちで評価できる点はたくさんありましたが、改善すべき点もたくさん見つかりました。想定外の児童の反応に臨機応変に対応することができなくて誘導しがちになってしまった点が特に反省点です。しかし、練習のときから苦戦していた発問と発問のつなげ方はうまくできたと思います。

　練習でグループⅡの模擬授業を終えたグループに私たちの授業を受けてもらう機会を設けました。そのときは一問一答の問題集を解いている気分と言われましたが、たくさんのアドバイスをもらうことができ、本番で素晴らしい授業を展開するためにやっておいてよかったと思いました。試行錯誤して指摘されたところを一つひとつ修正しました。すると、以前よりはすっきりとしていて、児童も退屈しない授業が出来上がったと思います。

　登場人物の言葉のあとにつながる言葉を児童に考えさせ、実際に演じてもらうことで、登場人物になりきり、その場面を想像する力を身につけることができると考え、この一連の指導を私たちは模擬授業の中で大切にしました。

　さらに、教師が問いを投げかけてなかなか児童から意見が出ないときは、すぐに教師が答えを話し始めるのではなくて待ち続けることができました。そういう間をつくることが、真の教師に近づく第一歩だと感じました。

　まだまだ完璧な授業を作り上げることはできないけど、完璧に近づくために精一杯努力することができました。国語は答えがわかれてしまうことがほとんどなので、児童たちの想像力を豊かにできる授業展開をしていけたらと思います。」

これらの一連の指導を通して、教育実習への向けた、国語科の指導として、「模擬授業」そして、分析の視点は有効な方法の一つだと実感している。